

パネル

より中国の宗教研究では仏・道を分離しての実態把握では真の姿を歪める可能性があることが指摘されている。神・仏あるいは仏・道の相克について文献などを利用した相互排斥の歴史事実の学的説明の必要は言を俟たないが、研究者が上からの目線で縦割りにしか宗教を捉えられないのでは幾つもの宗教や神仏に関わっている民衆の宗教の真の姿の説明は難しい。中国の宗教史でみられる中国（中夏）成立の儒・道とインド（夷）由来の仏という構図は儒仏道三教交渉史では夷夏論争などと呼ばれる。日本の神・仏の相克の研究のひとつとしての神仏分離・廃仏毀釈研究では、個々の事実説明とともに背景にある明治維新という強く日本を意識した歴史変動を念頭に入れた研究が必要である。

パネルの主旨とまとめ

櫻井 治 男

本パネルは次の主旨を設定して行なった。すなわち、日本という時空間における宗教現象として従前注目されてきた研究対象に神仏関係がある。これは神仏習合、神仏交渉、あるいは神仏混淆という表現をもつて、国内のみならず海外の宗教研究者にも関心が持ち続けられてきたテーマでもある。研究内容は多岐にわたるが、神仏習合について見れば、その現象の発生から展開にいたる歴史上の課題、また近世初期の武将にみられる神

国思想や各種の神道説など思想レベルや儀礼レベルの問題、あるいは個別の寺社における状況の説明など研究の蓄積が重ねられてきたという経緯をもつ。

神仏習合は、過去の歴史的課題だけではなく、現在に続く現象として日本宗教を特徴づけてきた実態があるが、その習合形態を制度的に区分する施策が、日本近代の社会変動、政治制度の変革のなかで採られたことも知られるところである。この施策を一般には神仏分離、神仏判然、廃仏毀釈と呼ばれるが、近代の宗教史を論述する上では必ずといってよいほど、取り上げられ、国内外の宗教研究において看過できない重要事項となっている。

一方、近年、神仏分離研究について再検討がなされ始めている。その特徴は、神仏分離を単に神道側や仏教側の得失的な観点から論じる傾向を脱却し、この施策が如何に日本近代の宗教の歩みを形成してきたか、また神仏分離と言われる「分離」とは何を意味するのか、さらにはその前提として位置付けられている神仏関係の「習合」「交渉」「混淆」とは何かを改めて歴史的な観点、あるいは神道学や仏教学、宗教学・民俗学など学術的手法をもつて問い直すところにある。また、神仏習合・分離の内容理解の上で、基本となる諸資史料の発掘、各地方・各社寺の実態的な分析研究の必要性が一層認識されている。

パネルの発題は、①「近世・近代の神仏関係の位相」（阪本是丸）、②「宗教都市宇治山田における神仏分離の諸問題」（牟禮仁）、③「近世における神仏関係―習合と分離―」（澤博勝）、④「日本と中国における仏教と固有の宗教との交渉の比較」

(河野訓)の四名が行なった。阪本は、神仏分離以前の「習合形態」の歴史の多様性、神仏分離の舞台に存在する「宗教者」たちへの異なる評価、すなわち「宗教的無節操」と「宗教的寛容性」に象徴的に表出される「日本人の宗教性」の特徴を読み解く必要性を指摘。牟禮は、伊勢神宮の所在する宇治山田における神仏関係と分離を巡る上で、信仰、思想、歴史・制度、空間・建物、物象、人、儀礼・祭儀など多様な様相への注視と、そこから導き出される二つの志向性を明示。澤は、近世国家論や社会論とも結合するかたちで、近年の盛んな近世宗教史研究の動向を踏まえ、神仏関係を論じる上で、幕藩権力による宗教統制、專業思想家による神仏理解、地域社会における神仏信仰(行事)の三つの位相を提示。河野は、中国宋朝以降の儒仏道三教融和傾向と其中的道教の優位性と仏教抑圧・廃仏などの流れをおさえ、日本の神仏分離・廃仏毀釈研究において、個別事実の解明と明治維新という強く日本を意識した歴史変動を念頭に入れた研究の必要を述べた。

コメンテータの鷲見定信氏からは、神仏分離研究が仏教研究において専ら近代以降のテーマとなっていることへの問題性、仏教が基層において神道と重層する点の如何、カミとホトケとの関係性の再考、分離状況を具体的に解明する上での寺院本末関係の検証など仏教側資料の加味の必要性、民衆の分離の受容と実態、明治期神祇行政に影響を与えた津和野藩の様相、中国における研究資料の状況と研究のあり方など、本パネルが掲げる「神仏関係史の再構築」に対する貴重な指摘や提言がなされた。

神仏習合・神仏分離における神職・僧侶の諸相

—— 神仏関係史再考 ——

代表者・司会 藤本頼生
コメンテータ 佐藤真人

古代・中世の神社組織における神仏関係

加瀬直弥

神社への仏教組織のかかり方に注目して、神仏関係を考察することは、その関係が祭祀・儀礼等のかたちで現れ、具体的実態をつかむことができるため、有効な手段といえよう。その点は、仏教的神祇解釈が数多くなされはじめ、密接な神仏関係が存在していたと考えられる時代、すなわち古代から中世にかけての神社においても同様であると考ええる。当時の具体的実態から神仏関係を把握する手がかりはいくつもあるが、本発表では、従来にない形態の神事が行われはじめる九世紀から、古代・中世転換期に当たる十二世紀に時代を絞り、僧侶が組織の中核を占めていた神社二社に焦点を合わせ、考察を加えることとした。

まず一点目は、山城石清水八幡宮における組織的發展過程と神事との関係である。石清水宮は貞観年間(八五九―八七七)のはじめに大和・大寺の僧・行教によって豊前宇佐宮より神霊を勧請し創建していたが、朝廷により正式に神主が置かれたの